

関所破り

下つ引夏兵衛

鈴木英治



講談





講談社文庫

関所破り

下っ引夏兵衛

鈴木英治

講談社

著者 | 鈴木英治 1960年静岡県生まれ。明治大学経営学部卒。1999年第1回角川春樹小説賞特別賞を「駿府に吹く風」(刊行時に『義元謀殺』と改題)で受賞。個性ゆたかな登場人物を次々に描き出す時代小説の新旗手として、注目を集める。『飢狼の剣』『血の城』などのほか「勘兵衛」「半九郎」「新兵衛」「手習重兵衛」「無言殺剣」「父子十手捕物日記」「口入屋用心棒」などの各シリーズがある。講談社文庫では、本書が『闇の目』に続く「下っ引夏兵衛」シリーズ第二作。

せきしよやぶ した びきなつ べ え
関所破り 下っ引夏兵衛

すず き えい じ
鈴木英治

© Eiji Suzuki 2008



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2008年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社ブリプレス管理部

印刷——中央精版印刷株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN978-4-06-276112-3

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

目次

第一章 袈裟斬り^{けさぎり} 7

第二章 小田原の男 109

第三章 掛川の鉄砲 178

第四章 半殺し 238



講談社文庫

関所破り

下っ引夏兵衛

鈴木英治

講談社

目次

第一章 袈裟斬り^{けさぎり} 7

第二章 小田原の男 109

第三章 掛川の鉄砲 178

第四章 半殺し 238

関所破り

下つ引夏兵衛

◆『関所破り』——下っ引夏兵衛のおもな登場人物◆

夏兵衛 なつべえ

伊造 いぞう

豪之助 ごうのすけ

おりん

由岐 ゆき (郁江 いくえ)

有之介 ゆうのすけ

参信 さんしん

千乃 ちの

滝口米一郎 たきぐちよねいちろう

お久芽 くめ

伊豆島謙吾 いずしまけんご

玉助 たますけ

天右衛門 てんえもん

岡坂丈ノ介 おかさかたけ すけ

木下留左衛門 きのしたる ざえもん

腕利きの泥棒。柔術をつかう。鼠が苦手。父に勘当されている。

老練の岡っ引。夏兵衛を盗人鼠苦手小僧と疑いつつ、探索の才を買う。

博打と女遊びが好きな伊造の放蕩息子。夏兵衛の呑み友達。

伊造の娘。しつかり者で一膳飯屋清水屋を切り盛りしている。

煮売り酒屋で春をひさぐ武家の娘。仇を追っている。夏兵衛が惚れる。

郁江の弟。肺をわずらい、佳兵衛長屋で伏せている。

巻真寺の住職。夏兵衛を住ませ、手習所を開く。夏兵衛の柔の師匠。

牛込改代町にある巻真寺の庫裏で、参信と暮らす。

北町奉行所定廻り同心。父の代から伊造に手札を預けている。

米一郎を尻に敷く内儀同然の女中。

柔術道場をひらく。おりんが道場に通う。

呪詛にくわしい万屋海風屋の女あるじ。

悪名高い金貸し甲州屋のあるじの大男。夏兵衛に店を狙われる。

甲州屋の用心棒。澄んだ目の優男だが、かなりの遣い手。

郁江・有之介姉弟に、仇として追われている浪人。

第一章 袈裟けさぎ斬り

一

うたた寝している。

うつらうつらして、船を漕こいでいるのを伊造いぞうは知っている。

こんなところで寝ちやあ、駄目だめだぞ。

おのれに強くいいきかせるものの、伊造には眠りの甘い誘いにあらがえるだけの力はない。

それだけ心地こころちよい。

疲れているのか。そうかもしれない。

なにしろ岡っ引というのは、厳しくてつらい仕事だ。並みの者にはつとまらない。

これまでの疲れが^{おり}澱のようにたまり、体に重しをつけているのか。

このままぐつぐつと眠りこむことができたなら、どんなに楽だろう。

だが、それはできない。仕事が残っているからではない。ここが娘の^{めき}おりんの店だからだ。

店は清水屋^{しみずや}といい、うまいことで評判の一膳飯屋^{いちぜんめしや}である。おりんが^{めき}目利きで、下手な物は仕入れてこない。いい物だけが常にそろっている。その上、おりんは包丁が達者だ。まずいはずがない。

土間に五つの長床^{ながしよくぎ}几が置かれ、あとは十畳の座敷があるだけの店。

伊造は一人、座敷の一番奥に座りこみ、壁に背中を預けている。

午後の八つ（午後二時）すぎに、仕込みのためにいったん店は閉めている。今は七つ（午後四時）を少しまわったあたりで、店はまだはじまっていない。七時半（午後五時）に店は再開する。酒も供しているから夕暮れを迎える頃には、飢えた者たちで、ぐつと混んでくる。

その前に、出なければならぬ。

しかし、半分ひらかれた入口から吹きこんでくる風は、じき冬がやってくるとは思えないほどあたたかく、まるで上質な着物にふんわりと包まれているような心持ち

だ。払いのけようなどという気にならず、伊造はずっとこのままでいたいと考えはじめている。どこか母に抱かれている感じに似ている。

母のことなど、最近では思いだすことはなかった。

やさしかった母。

子供の頃の笑顔が浮かんできた。目を細め、穏やかに見ている。

ああ、懐かしいなあ。会いてえよお。

伊造は手を伸ばした。ふっと母の顔が消えた。

どうしてだい。

目尻に涙を感じた。

うたた寝しながら、泣くなんて芸当ができるようになったか。やはり歳を取ったのか。

こんなことじゃあ、いけないんだがなあ。

尻がゆつくりと動き、背中が壁から離れてゆく。

ああ、わしは横になろうとしているんだなあ。

それがわかったが、伊造は体をとめようという気にならなかった。

ずるずると動いて、畳に背中がついた。

ああ、眠りこんでしまうなあ。おりんが起こしてくれるからいいか。

「おとつつあん」

おりんの声がした。予期したよりずっとはやかったから、伊造は驚いて目をあけ、上体を起こした。

「どうした」

「こんなところで寝こんじゃって、風邪かぜを引くわよ」

伊造は唇くちびるをゆがめるようにして笑った。

「そんなにやわにはできちやいねえ」

「どうかしら」

おりんが笑みを浮かべて小首をかしげる。その仕草のかわいさに、我が娘ながら伊造は目をみはりそうになった。

「なにが、どうかしら、なんだ」

「だって、おとつつあん、もう歳だもの。若い頃は確かに頑丈がんじょうだったんでしょけど、今は……」

「今だって同じだ」

伊造は軽々と起きあがった。いや、その気だったが、腰のあたりがぎくりと痛ん

だ。

「大丈夫」

おりんが腕をのばして、支えようとする。

「平気だ」

伊造はおりんの腕をそつと払い、壁に手をついた。腰をさすって、痛みが去るのを待つ。

「おとつつあん、本当に大丈夫なの」

「ああ、大丈夫に決まっているだろう。おめえのいう通り、若い頃と同じってわけにはいかねえが、このくらいの痛み、たいしたことはねえ」

「でも……」

おりんが案ずる瞳で見ている。

「おとつつあん、八つすぎに見廻りみまわから帰ってきて、遅いご飯を食べて、それからここですつと寝ていたのよ。とても疲れているんじゃないの」

「そんなことはねえ」

「でも、疲れてなきや、こんなところで寝こむなんてこと、ないでしょう」

「寝こんでなんかいやしねえ。考えごとをしていただけだ」

「またそんな屁理屈^{へりくつ}いつて」

「屁理屈なんかじゃねえよ。それにおりん」

「なに」

「屁、なんて言葉、若い娘がいうもんじゃねえよ」

腰の痛みが去った。伊造はおりに知られないようにひそかに息をつき、壁から手を放した。

おりんが病人を見るような目で、見つめている。

「おりん、いつまでもわしを相手にしていいのか。仕込みはまだ終わっていないんだろうが」

「そりやそうだけど、心配なもの」

娘が気にかけてくれるのはひじょうにうれしく、ありがたかったが、伊造の口から感謝の言葉は出なかった。

「あの馬鹿はどうした」

「馬鹿って誰」

おりんがしらつとした顔できき返す。

「とぼけるんじゃねえよ」

「とぼけてなんかいないわ」

「馬鹿と叫びたなら、うちには一人しかいねえだろうが」

「兄ちゃんのこと」

「そうさ。豪之助だ」

「兄ちゃんは馬鹿なんかじゃないわよ。そのことは、おとつあんだってわかってるんじゃないの」

伊造は一瞬、つまつた。確かに、その通りだ。せがれの豪之助は博打と酒と女遊びが大好きなどうしようもない男だが、なかなか鋭いところがある。

豪之助が伊造の跡を継いで岡っ引になりたいといったとき、伊造は、おめえになんかつとまりやしねえ、とばかりに一蹴したが、その後、豪之助が意外に向いているかもしれないと知り、今はどうするか、心がぐらついている。

いや、どちらかといえば、すでに継がせるほうに傾いている。せがれが自分と同じ道を選んでくれるというのは、やはりうれしいものなのだ。

しかし、とも思う。やつに本当に岡っ引がつとまるのか。命の危険にさらされるのも、しばしばだ。そういうとき、せがれは危地を脱することができるのか。

おりんがにこにこ笑っている。